

自信の倫理学

ウィリアムズ、フリッカー、ウィトゲンシュタイン左派

東京大学 安藤隆之

はじめに

私たちは、さまざまな倫理的確信を抱きながらこの世界に生きている。生き方や生きがいに深く関わりうるこうした確信は、しかし、異なる時代や文化に遭遇した際に懐疑に晒され、これまで確信をもっていた生き方が本当は幻想なのではないか、はたして今の生き方を続けてよいのだろうかと私たちはしばしば思い悩む。そうした懐疑的意識により、生活の背後にある偶然性と恣意性は暴かれ、確信をもった私たちの生き方は揺らいでしまうように思われる。それでは、私たちはいかにして懐疑的意識をもちつつも自らの生き方に確信をもって生き抜いていけばよいのだろうか。

本稿の目的は、この問いに取り組むことである。そこで筆者は、バーナード・ウィリアムズが提示した「自信 (confidence)」(Williams 1985) という概念を手がかりにすることが、私たちの倫理的確信やコミットメントを養うことを可能にする有力な戦略であると主張する¹。そのために本稿では、自信の内実や、自信に基づく倫理学の方法を明らかにしていく。

第一節では、私たちの確信を自信の観点から捉えるというウィリアムズの議論を確認する。第二節では、ミランダ・フリッカーの論考を参照しつつ、自信と反省の関係および自信の定義を明らかにする。第三節では、懐疑的影響を受けつつも自信をもった実践や生活を行なっていくための方法である「ウィトゲンシュタイン左派 (Left Wittgensteinianism)」(Williams 1992a: 37) の立場を取り上げる。

第一節 「自信」の提示——ウィリアムズの議論

ウィリアムズは『生き方について哲学は何が言えるか』において、私たちの倫理的確信をどのように理解すればよいかという問題に取り組んでいる (ibid.)。彼はまず、倫理的確信についての既存のモデルを二つ紹介し、それらを批判している。それらはそれぞれ、「確実性モデル」と「決断モデル」と呼ばれる (ibid.: 188)。

確実性モデルによれば、倫理的確信は哲学的思考を経て得られた知識に由来する確実性によってもたらされる。伝統的な哲学は揺るぎない普遍的真理を探究するための学であり、それゆえ哲学的思考を経て得られた知識はその思考の合理性や厳密さから、その確実性が保証されているとされる。このように、確実性モデルは倫理的確信の源泉を知識の確実性だと見なす。しかし、このモデルには問題があるとウィリアムズは言う。

確実性モデルに肩入れする人々は、次の明らかな事実を見落としている。つまり、もし私たちが何について確信をもつべきか同意できなければ、認知的確実性をどれだけ信頼していても、それは倫理的確信をもたらすことができないという事実である (ibid.: 188)。

たとえば、「ペットを飼うことは不正である」という命題が確実な知識として提示されたとしよう。そこで、このモデルは、私たちがその知識に基づいて「ペットを飼うべきではない」という確信を構成することができると思う。しかし、このモデルは私たちがそうした仕方で確信をもつことに同意すべき理由について、何も語っていない。つまり、以上の議論を認めただけでは、

そうした確実な知識から確信を構成することに合意しなければならないということは必ずしも導出されないのだ。究極的には、何に基づいて自らの確信をもつのかはその当人次第である。こうした理由から、確実性モデルは確信についての十全な捉え方を提供しているとは言えない。

他方で、決断モデルによれば、生き方や倫理の問題に確実な知識など存在せず、すべては実存する人間の行為や投企といった決断の問題であるとされる。しかし、こうした捉え方も確信のモデルとしては不適切である。このモデルによれば、倫理的確信の源泉は、特定の倫理的原則を採用するという決断や、ある一定の生き方をするという決断にある。しかし、このモデルが主張するように、「もし倫理が決断の問題であり、かつ私たちが不確実であるならば、私たちは何を決断すべきかについて不確実であることになる」(ibid.)。そこで、もし倫理的確信を構成する決断が不確実なものであれどどんな決断でもよいとされてしまえば、私たちは当てずっぽうや破れかぶれに下された決断でも確信を形成できることになってしまう。しかし、それはもはや生き方についての「確信」と呼ぶことはできない代物である。ゆえに、決断モデルもまた倫理的確信の理解に向けた適切な枠組みを提供できていない。

いまや私たちには、この二つのモデルのどちらにも与さないような「第三の捉え方が必要であり、それを表す最良の言葉は自信である」(ibid.: 189)とウィリアムズは語る。彼によれば、自信は制度や養育、公共の会話によって促進される「基本的に社会的な現象」(ibid.)である。また、社会的説明によって記述される自信は議論や反省とも関わりをもつ(ibid.)。というのも、もし自信が合理的議論や反省から隔たった位置にいとすれば、自信は他の諸善を犠牲にしかねない無反省で頑固な心理的状态となってしまうだろうからだ。それゆえ、自信は単なる偏屈さや無反省とは区別される状態である。またもちろん、自信モデルは確信の源泉を確実性とも決断とも見なさないがゆえに、先に説明した二つのモデルの欠点を回避している。このように、ウィリアムズは倫理的確信についての極端な主知主義モデルと主意主義モデルの両方の限界を見据え、新たな可能性を提示している。

第二節 「自信」の反省的条件——フリッカーの議論

しかし、ウィリアムズの以上の議論には、いまだ説明されねばならない論点が残っている。そのうちのひとつは、自信と反省の関係についてである。彼は、自信を偏屈さや頑固さから区別するために反省が必要であると語っている(ibid.: 189-190)が、自信と反省は一見すると相反するように思われる。なぜなら、現行の實踐に反省が差し挟まれることによって、私たちはそれに自信をもって生きていくことを妨げられてしまうように思われるからだ。それゆえ、反省がいかにして自信を可能にするのか、自信が必要としている反省はどのような種類のものなのかを明らかにする必要がある。そこで、本節ではフリッカーの議論を参照しつつ、自信と反省の関係および自信の定義について建設的な解釈を試みる。本節では最終的に、〈自信とは、特徴的な反省的条件を備えた規範的な認識的状态として記述される構えである〉と主張されることになるだろう。

フリッカーによれば、自信が反省を必要とするのは、それが規範的な概念だからである(Fricker 2000: 9)。もし、自信が単なる社会現象や個人の心理状態という特徴づけのみで同定されるとすれば、私たちはどんな対象に対しても自信をもつことが可能になってしまい、偏見への盲目的な固執といった悪しき保守主義と区別できなくなってしまう。ゆえに、自信がひとつの倫理的理想であるためには、抑圧や排除を助長する悪しき保守主義から距離をと

り、それを意識的に批判する規範的状态として理解される必要がある。

しかし、先に述べたように、極端な反省は自信をもつことを妨げてしまう可能性をもっている。それゆえ、自信がひとつの倫理的理想として機能するためには、自信は「悪しき保守主義と過度に神経質で誇張された自問自答の類いとのあいだに位置するものでなければならない」(ibid.)。ここで、自信が適切な規範的状态であるために必要な反省とは何か、すなわち自信を可能にするために必要な「自信の反省的条件」(ibid.: 6)とは何か問われなければならない。

自信を可能にする反省は第一に、能動的にはたらくものでなければならない(ibid.: 9)。というのも、もし反省が何らかの不満や害がはっきりと顕在化した後になってはじめて開始されるという受動的なものであれば、現在の私たちの倫理的な生活に蔓延る偏見に満ちた概念を内在的に批判することが困難になってしまうからだ。それゆえ、反省は自分たちの概念に対する内在的批判を可能にする能動的なものでなければならない。

第二に、自信を可能にする反省は集団主義的なものでなければならない(ibid.)。すなわち、必要な批判的・反省は単に個人によって行なわれるものではなく、集団や共同体によって、あるいは集団や共同体に属する個人によって行なわれるものとして理解することが必要である。というのも、偏見やステレオタイプへの盲目的な固執に陥らないためには、適切な信念に至るための反省が個人ひとりのみによるものではなく、人々のあいだでの相互確認や支持を経た集団的な実践である必要があるからだ。たとえば、水中に入った棒が曲がって見えるという錯覚を私が真実として認識しないためには、その現象を別の角度から見た者や、まっすぐな棒の姿を見た者によって私の認識が錯覚であるという指摘を受けることが重要な役割を果たす。このように、経験科学を含むほとんどの領域と同様に、認識的な自信を深めるためには反省的活動を分業し相互に確認し合うという集団的な実践が必要となる²。

第三に、自信を可能にする反省は社会的アイデンティティへの「再帰的な批判的意識」(Fricker 2007: 91)に満ちたものでなければならない。私たちが偏見やステレオタイプといった悪しき保守主義から距離を保ち続けるためには、偏見に力を与えている特定の社会的アイデンティティへの批判的意識が必要になる。また、その意識は、私たちの社会的な世界には偏見を助長する社会的アイデンティティが存在し、それに盲目的な人々で溢れているという外在的な意識だけであってはならない。というのも、偏見に基づいた認識的不正をはたらく人々は概して、たとえば自分が男性・白人・富裕層であるということが自らの知覚や判断に対してどのような違いをもたらすのかということや、これを考慮し損ねているからだ(ibid.: 91-92)。それゆえ、反保守主義的・反省に必要な意識とはむしろ、自分自身にもそうしたアイデンティティが与えられているという内在的で再帰的な意識である。同様に、偏見や頑固な信念にとどまらない健全な自信を得るためには、自らの社会的アイデンティティに再帰的に反応する批判的・反省が必要となる。

また、以上の分析により、これらの反省はどれも、偏見の影響を中和することにより、私たちが誤った信念をもつことがないように信念の部分的修正を繰り返すことで、信頼性の高い整合的な認識的状态へと私たちの信念体系を収斂させていくという全体論的な目標をもっている。なぜなら、社会のなかで偏見が絶えず変化し、おのずと更新されていくという偏見の本性を考慮すれば、私たちが実際に望むことができるのはせいぜい批判的・反省という繰り返しの努力を通じて社会的再帰性を達成することぐらいだろうからだ(ibid.: 97)。こうした反省の特性を鑑みれば、自信を可能にする反省は私た

ちの自信や確信の対象となっている信念を全面的にキャンセルしてしまうような破壊的な反省とは区別されるべきである。以上の説明を通して私たちは、自信は反省を必要としているとするウィリアムズの主張の理解に近づくことができる。

最後に、私たちは次の点に注意するべきである。すなわち、自信は、上記の特殊な諸反省を経て最終的に到達される能力として理解されるべきではないというものだ。自信は倫理的に望ましい状態ではあっても、賢人だけが最後に得られるような境地ではない。むしろ、自信は反省と共にある日々の実践や営為に身をおくなかで次第に獲得される「構え (*stance*)」(Fricker 2000: 10) であり、反省の目的としてではなくその副産物として理解されるべきである。

以上の注意を踏まえた上で、本節の主張である〈自信とは、特徴的な反省的条件を備えた規範的な認識的状态として記述される、一種の構えである〉という定義の意味が明らかとなる。自信を身につけるためには、偏見などの悪しき保守主義を能動的に批判できるような反省が必要であり、そのような反省は社会的アイデンティティへの再帰的な意識に根付いた集団的な概念批判や修正を前提としている。こうした反省への従事を通じて、私たちは規範性を併せ持つ自信を身につけることができる。こうして、私たちは自信の実質的定義に到達したと見なすことができるだろう。

第三節 「自信」の方法論——ウィトゲンシュタイン左派

本節では、前節までの考察で得られた自信の理解を下敷きに、自信を育むことが私たちの倫理的な生活に向けられた懐疑に対する戦略となりうるのかという当初の問題設定に立ち戻る。こうした懐疑に対する戦略として、本節ではウィリアムズが「ウィトゲンシュタイン左派」と特徴づける方法を取り上げる。

本題に入る前に、左派と同様にウィトゲンシュタインの反基礎づけ主義的哲学から出発してそこから保守的な結論を導出する立場のひとつを検討しよう³。

さて、現代の哲学者たちは、実体や理性に基づいて示される普遍的真理を探究する近代哲学の試みを反省し、しばしば反基礎づけ主義的なアプローチに訴えてきた。なかでも、後期ウィトゲンシュタイン哲学はそのようなアプローチをとる人々によってさまざまに利用されてきた (Williams 1992a; Vinten 2014)。そうしたアプローチは「ウィトゲンシュタイン右派」(Queloz & Cueni 2021) と呼ばれうる。

ウィトゲンシュタインによれば、私たちの言語実践や生活形式はある特定の哲学的基礎のうえに成立しているのではなく、むしろさまざまな信念や命題のネットワークによって相互に支え合いながら存立している (Wittgenstein 1969: § 141, § 410)。この全体論的理解に基づき、右派は私たちの実践や文化を「精巧に調和のとれた機能的全体」(Queloz & Cueni 2021: 760) と見なす。そして右派によれば、そこに概念や実践、ニーズ同士の緊張はなく、私たちの生活は変化の少ない静的で時代に関わらないものとされる (ibid.)。

こうした理解を下敷きに、右派は私たちの実践の安定した継続について次のように考える。第一に、この立場は「哲学はすべてをあるがままにしておく」(Wittgenstein 1953: § 124) という考えに基づき、哲学に実質的な批判的役割を認めない。なぜなら、私たちの生活に関する全体論的理解により、哲学すらも私たちの現行の実践の一部として取り込まれてしまうからだ。第

二に、この立場は「私たち」という言葉を、包括的で境界のない「私たち」と捉えることにより、知的に会話可能なすべての人々を「私たち」に内包する (Williams 1992a: 36)。裏返せば、「私たち」の実践の外にあるものはすべて理解不可能な実践であると見なされることになる。こうして右派は、懐疑の不安定な影響に抗して、私たちの実践や文化的習慣がこれまでであったように安定して継続されていくと考える。

しかし、右派の方法には問題がある。まず、この立場は哲学に実質的な批判的役割を認めずに現行の実践を重視するために、それらが単なるひとつの選択肢でしかないを見なすことを可能にする批判的視点を持ち合わせることに困難が伴う (Queloz & Cueni 2021: 761)。それゆえ、右派には私たちの実践や慣習が偏見に根付いているという可能性を再帰的に検討する余地が用意されていない。また、右派は「私たち」の内部に理解可能なすべての実践を含むことによって、それらのオルタナティブが存在する可能性を理解不可能なものに見なす傾向を生じさせてしまう。それゆえ、右派は実践の偶然性や恣意性を暴いてしまう懐疑的影響を十分に認めることができていない。

また、オルタナティブや批判の可能性を認めないということは、前節で論じた自信の反省的条件に反する。自信とは、自分たちの倫理実践や倫理的価値への適切で十分な反省に根ざしたものであり、それゆえオルタナティブの可能性にも開かれている。しかし、右派によって考えられる自信は、他の種類の実践や価値観に遭遇した際にそうした批判的能力を発揮できず、そのとき揺らいでしまう。つまり、右派の方法によって獲得できる自信はせいぜい、偏屈さと区別できない単なる自信 (mere confidence) にすぎないものとなってしまうのだ (ibid.: 759)。したがって、偶然性への意識に基づきつつ自らの実践を健全に継続させていくためには、適切な自己批判と反省を経た合理的自信 (reasonable confidence) が必要となる (Williams 1992b: 203)。

そのような合理的自信を獲得することで懐疑と対峙する方法が、ウィリアムズが提示したワイトゲンシュタイン左派である。

基礎づけ主義を否定した場合、私たちに残されるのは、既存の倫理的観念をあるがままに受け入れなければならないという不活性な保守主義や機能主義的な保守主義ではない。それとは対照的に、ひとたび基礎づけ主義を排除した結果として生じる倫理的思考の描像が歴史的・社会的にリアリスティックなものとなれば……、その描像は、既存の制度や捉え方、偏見、権力を批判するために、何が倫理的に重要なのかについて再解釈する可能性をもたらす。……こうした批判に限って言えば、ワイトゲンシュタイン哲学が示唆するような形で特徴づけられる反基礎づけ主義の政治思想がラディカルな方向に向かうべきではないとする理由はどこにもないように思われる。これをワイトゲンシュタイン左派と呼ぶことができるだろう (Williams 1992a: 37)。

このように、ウィリアムズによれば、後期ワイトゲンシュタイン哲学がしばしば保守的に解釈されてきたからといって、よりラディカルな解釈の可能性がないと考えるべき理由は必ずしもない。

この立場は、少なくとも以下の二つの命題によって特徴付けられるとされる (Queloz & Cueni 2021: 764)。

- (1) 私たちの概念実践は、調和のとれた機能的全体ではなく緊張に満ちたその場しのぎの寄せ集めであるという想定の下ではたらいっている。

- (2) 私たちの概念実践についてのポイントベーンズの説明と呼ぶものを用いて、私たちのニーズからそのポイントを明らかにする。

これらの命題に基づき、左派は右派と対照的な特徴をもつとされる。まず(1)より、私たちの実践を偶然に寄せ集められた多数のニーズの歴史的産物であると考えられる。それゆえ、ニーズ同士は調和のとれた機能的全体を必ずしも構成せず、むしろしばしば競合する緊張に満ちた雑多な構造を構成する。また、左派は私たちの概念実践を偶然の歴史的産物であると理解するため、それを時代と共に変化する動的な構造を有するものとして捉える。左派によれば、こうした理解により、懐疑的影響の威力に十分に目を向けるリアリステイックな見方を備えることができる。

次に(2)より、左派は私たちの概念実践やそのオルタナティブがいかにして理解可能であり、それがどのような合理的動機に基づくかを説明する。右派において、私たちの外側にある生活形式は、理解不可能な狂人の生活と見なされるのだった。それに対して左派は、私たちの思想や行為を正当化するために、それらが基づいている概念がどのような具体的なニーズや歴史に基づいているのか、そしてそれが理解可能で合理的かどうかを証明することで当の実践を正当化する。ここで用いられるのが系譜学(genealogy)の手法である。ウィリアムズにおいて系譜学とは、「文化的現象がどのように生じたのか、どのように生起しうるのか、どのように生起すると想像されうるのかを記述することで、それを説明しようとするナラティブ」(Williams 2002: 20)である。系譜学は、正当化の対象となる概念や実践の実際の歴史の記述だけでなく、フィクションの歴史の記述も含む。なぜなら、原初的な社会共同体というフィクションを想像することによって、社会に生きる私たち人間の基本的なニーズを実際の歴史よりも明瞭かつ簡潔に示すことができるからだ。フィクションを用いて私たちの概念実践の根拠に光を当てるこの方法は、「自然状態論(State of Nature story)」(ibid.: 21)と呼ばれる(cf. Fricker 2007; 渡辺 2024)。

そこで、ウィリアムズの実際の議論をもとに、この手法が概念実践を正当化する過程を見ていこう。ウィリアムズは先の自然状態論を用いて、真理の価値に忠実であることを示す徳である「信実(truthfulness)」(Williams 2002: 1)という概念の正当化を試みている。信実の徳は、自然状態論の想定に基づいて次のように正当化される。最小限の社会の成員は、まず生存のために必要な真なる情報へのニーズやそれを共有するニーズをもつようになる。そして最終的には、それらのニーズに基づいて、情報交換を行う他者との信頼関係を安定させようとすることに対するニーズが生じるようになる。以上のニーズを満たすのが、情報を偽りなく他者に伝達する「誠実さ(sincerity)」と、真なる情報を追求する「正確さ(accuracy)」という徳である(ibid.: 87)。これら二つの徳の正当化から、両者によって構成される信実の徳とそれに裏付けられた概念実践が正当化されることができると考えることができる。このように、歴史的探究によって対象となる概念実践の正当化根拠を哲学的結論として引き出すという系譜学的手法を利用することにより、私たちはそうした実践に対する自信を育むことができる(Hall 2014: 555)。こうした一連の正当化方法こそが、確信と懐疑のあいだで自信をもって生き抜いていくための左派の戦略である。

そして、こうした説明がポイント(Witz)⁴をおさえたものになっていることも重要である。私たちがもつ概念の実際の歴史やフィクションを辿ることによってそのニーズを抽出する際、そのニーズが対象の概念の合理的な正当

化を果たすという点でまったく検討はずれなものであってはならない。たとえば、「親切」という概念を考える際、「わざと親切に振る舞うことで相手を困らせることができるから」という行為の理由を親切という概念のニーズとして挙げることはポイントを外している。このように、対象となる概念の正当化説明にとって重要なのは、その説明が当の概念実践のポイントをおさえたものとなっている、という点である。

以上のような説明によって、対象となる概念実践が合理的なニーズに基づいているということが明らかとなる。つまり、対象となる概念実践の根拠を明らかにする方法を備えるにより、その概念がたとえ私たちの文化や慣習の外部のものだとしても、私たちはそれを理解することができるようになる。したがって、右派とは異なり、左派は自らの実践の偶然性と理解可能なオルタナティブの可能性の両方に反省的意識を向け続けることができる。こうして私たちは、現行の実践や価値観の偶然性やオルタナティブの可能性に意識的でありながらもそれを正当化しながらコミットメントを保ち続けるという左派の方法に基づいて、合理的自信を身につけることができるのである。

ただし、左派の方法には次のような疑いが投げられるかもしれない。すなわち、信頼していた倫理実践が時代の変化と共に変容し失われてしまうという懐疑的意識は不断に差し挟まれるにもかかわらず、それに対してただ自信を育むという戦略だけで懐疑の影響を克服することができるとするウィリアムズの見解は、懐疑の影響を低く見積もった単なるオプティミズムではないのか。

しかし、こうした疑いはウィリアムズの姿勢を誤解している。というのも、自信はオプティミズムではなく、むしろ「ニーチェが強さのペシズム (pessimism of strength) と呼んだものに基づきうる」(Williams 1985: 190) からだ。ウィリアムズによる私たちの倫理的生活の背景にある世界の捉え方は根本的に、オプティミズムではなくむしろペシズムに基づいている (cf. Williams 1996)。強さのペシズムとは、真理を愛しそれに到達することによって揺らぎない幸福へと至ることができると想定するソクラテスのオプティミズムでもなければ、世界の価値や真理を否定しながらデカダンスへと降下し文字通りロマンとして真理を懐古するほかない受動的なロマン主義的ペシズムでもない。そのような世界の価値や真理の存在に関する悲観的な見方を取りつつも、そのような世界を祝福し、強く肯定する「デュオニユソスのペシズム」(Nietzsche 1967: § 370) である。そして、ウィリアムズが求めた自信も、価値や真理に対する懐疑によって開かれた、捉えどころのない確実性と隔々まで行き渡る偶然性とのあいだのギャップを埋めるためのものである (Jenkins 2012: 322)。このように、彼の洞察は客観的で確実な基礎の不在を十分に自覚したペシスティックな意識の中で行なわれていると言える。

以上の議論が正しければ、合理的な客観的基礎を置くことで懐疑を排除しようとする独断的な基礎づけ主義や、現行の生活形式を保守的に解釈することによって懐疑に対抗しようとする右派の方が、むしろオプティミスティックに事態を捉えていると言える。他方、左派の方法を携えた自信をもった生き方は、懐疑を否定することによって獲得される独断的・保守的な姿勢なのではなく、偶然性や恣意性、歴史性を受け入れつつも自らの生き方に確信をもって生きるというリアリスト的な世界観に基づいた力強い姿勢である。したがって、自信に基づいて行われる倫理学は、懐疑を克服できるとするオプティミズムではなくむしろ懐疑と共に生きる道を選ぶペシズムである。

おわりに

最後に、本稿の議論を振り返る。第一節では、ウィリアムズの議論を紹介することで、私たちの倫理的確信を適切に理解するためには自信という観点が必要だということを明らかにした。第二節では、自信と反省の関係およびその反省の条件を明らかにすることにより、自信が悪しき保守主義にも過剰な自己批判にも陥らないようにするための特定の諸反省を必要とすると論じた。また、こうした反省的条件の分析を通じて、自信の仮説的定義を提示した。第三節では、懐疑的意識の下で自信をもち続けるための戦略として、ウィトゲンシュタイン左派の方法を再構成した。それによれば、左派は実践や生活形式の偶然性や歴史性への意識を踏まえつつ、系譜学的手法に準ずる個別具体的な正当化によって生活に合理的自信を得ようとするのだった。

本稿は、自信をもった生き方の条件や方法を探究しそれを推奨する、いわば〈自信の倫理学〉の予備学である。この倫理学は、普遍的原理や客観的基盤に頼る安全で確実な道を選ばず、ある意味では不確実で危険な脇道へと逸れていく。しかし、道の途中で行進を断念するのではなく、そこで幾度も来た道を再帰し、他者との合理的議論を経て反省を試み続けることこそが、ウィリアムズの求めた構えである。楽観的な基礎づけ主義でも粗雑な反基礎づけ主義でもない、それらに抗してあるがままの現実を見据える姿勢がここで求められている。

参考文献

- Altham, J., 1995, "Reflection and Confidence," Altham, J. & Harrison, R. (eds.) *World, Mind, and Ethics: Essay on the Ethical Philosophy of Bernard Williams*, Cambridge University Press: 156-169.
- Fricker, M., 2000, "Confidence and Irony," Harcourt, E. (ed.) *Morality, Reflection, and Ideology*, Oxford University Press: 87-112, URL = https://www.mirandafricker.com/uploads/1/3/6/2/136236203/confidence_and_irony.pdf (accessed 2024-12-5): 1-19.
- Fricker, M., 2007, *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*, Oxford University Press. (ミランダ・フリッカー [2023] 『認識的不正義：権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』佐藤邦政(監訳)・飯塚理恵(訳), 勁草書房.)
- Hall, E., 2014, "Contingency, Confidence, and Liberalism in the Political Thought of Bernard Williams," *Social Theory and Practice*, Vol. 40, No. 4, Florida State University Department of Philosophy: 545-569.
- Jenkins, M., 2012, "Williams, Nietzsche, and Pessimism," *Journal of Nietzsche Studies*, Vol. 43, No. 2, Penn State University Press: 316-325.
- Lukomska, A., 2022, "Confidence: On the Possibility of Ethical Knowledge," Szigeti, A. & Talbert, M. (eds.) *Morality and Agency: Themes from Bernard Williams*, Oxford University Press: 110-131.
- Nietzsche, F. 1967, *The Birth of Tragedy*, in Basic Writings of Nietzsche, Kaufmann, W. (trans.) New York Modern Library. (ニーチェ [1993] 『ニーチェ全集 2：悲劇の誕生』塩屋竹男(訳), ちくま学芸文庫.)
- Queloz, M. & Cueni, D., 2021, "Left Wittgensteinianism," *European Journal of Philosophy*, Vol. 29, Issue 4: 758-777.
- Williams, B., 1985[2011], *Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge. (バーナド・ウィリアムズ [2020] 『生き方について哲学は何が言えるか』森際康友・下川潔(訳), ちくま学芸文庫.)

- Williams, B., 1992a, “Pluralism, Community and Left Wittgensteinianism,” Hawthorn, G. (ed.) *In the Beginning Was the Deed: Realism and Moralism in Political Argument* [2005] Princeton University Press: 29-39.
- Williams, B., 1992b, “Who Needs Ethical Knowledge?” in his *Making Sense of Humanity: and Other Philosophical Papers 1982-1993* [1995] Cambridge University Press: 203-212.
- Williams, B., 1996, “*The Women of Trachis: Fictions, Pessimism, Ethics,*” Burnyeat, M. (ed.) *The Sense of the Past: Essays in the History of Philosophy* [2006] Princeton University Press: 49-59.
- Williams, B., 2002, *Truth and Truthfulness: An Essay in Genealogy*, Princeton University Press.
- Wittgenstein, L., 1953[2009], *Philosophische Untersuchungen = Philosophical Investigations*, Anscombe, E. & Hacker, M. & Schulte, J. (eds.) Hacker, M. & Schulte, J. (trans.) Chichester, U. K. Wiley-Blackwell. (ウイットゲンシュタイン [2020] 『哲学探究』 鬼界彰夫 (訳), 講談社.)
- Wittgenstein, L. 1969[1975], *Über Gewissheit = On Certainty*, Anscombe, E. & Wright, G. (eds.) Anscombe, E. & Paul, D. (trans.) Basil Blackwell, Oxford. (ウイットゲンシュタイン [1975] 『ウイットゲンシュタイン全集 9: 確実性の問題・断片』 黒田亘 (訳), 大修館書店.)
- Wittgenstein, L. 1989, *Wittgenstein's Lectures on the Foundations of Mathematics, Cambridge 1939*, Diamond, C. (ed.) University of Chicago Press. (コーラ・ダイヤモンド編 [2015] 『ウイットゲンシュタインの講義: 数学の基礎篇 ケンブリッジ 1939 年』 大谷弘・古田徹也 (訳) 講談社学術文庫.)
- Vinten, R., 2014, “Was Wittgenstein a Conservative Philosopher?” in his *Wittgenstein and the Social Sciences: Action, Ideology and Justice* [2020] Anthem Press: 69-86.
- 渡辺一樹, 2024, 『バーナード・ウィリアムズの哲学: 反道徳の倫理学』 青土社.

- 1 自信についての研究は決して盛んではないが、たとえば、自信を濃い (thick) 倫理的概念と関係づけつつウィリアムズを批判したものとして Altham 1995、自信を一種の性向と見なす解釈を展開している Lukomska 2022 等がある。しかし本稿は、ウィリアムズの自信論を擁護するという点、そして自信を性向の一種とは見なさない点 (本稿第二節参照) で、これらの先行研究とは異なる。
- 2 ただしこれは、自信をもつことができる主体は集団に限られるという話ではない。もちろん、個人も自信をもつことができるし、ある意味では人格的主体であるそれぞれの個人しか自信をもつことはできない。要点はむしろ、個人が自信をもつことができるのは、その個人が属する集団が自信をもっている場合に限られるという条件である。
- 3 倫理的懐疑論に対する戦略には、私たちの倫理的実践が哲学的思推によって導出される普遍的概念に基礎づけられていることを示すことで懐疑的影響を無効化する基礎づけ主義や、私たちの倫理的実践を合理的に基礎づける包括的議論は一切存在しないと考えることで、懐疑に抵抗するという野心そのものを放棄するアイロニズム等が存在する。しかし、前者は懐疑の影響を一切受けない普遍的基礎を示すという戦略であり、後者は私たちの生活や言葉を正当化するという試み自体を放棄していることから、両者とも、懐疑の影

響が私たちの実践にもたらす危機という観念にあまり関心を寄せない。ゆえに、これらの立場は本稿と問題設定を共有していない。

⁴ ポイントとは、要点・眼目・目的等を意味するウィットゲンシュタインの用語である（Wittgenstein 1989）。たとえば、ある人物がボードゲームの勝利条件や道具の使い方を含むすべてのルールを理解したものの、そのゲームの醍醐味や本質が分かっていないという場合、その人物はそのゲームのポイントを外している。